

20世紀前半のメキシコ・シティにおける子どもの労働 —路上で新聞を売る子どもたち

青木利夫

はじめに

世界的に児童労働の禁止が叫ばれている今日、世界には子どもの労働なくしては生活が成り立たない家庭や、みずからが働かなければ生きていくことのできない子どもが存在する地域があることも事実である。そのような地域のひとつとしてメキシコがある。

メキシコでは、1821年の独立以降、公教育制度が整備されるにつれて学齢期にある子どもたちの就学が少しずつ進むが、20世紀に入っても学校に通うことなくなんらかの労働に従事している子どもたちは非常に多かった。さらに、後述するとおり、1910年に革命が勃発し、その後10年近く内戦が続いた20世紀前半には、教育や福祉に関する制度が整備されつつも、それが十分に機能したとはいえ、圧倒的な貧富の格差が解消されることなく国民の多くが貧困の状態におかれた。このような状況のなか、初等教育が無償化および義務化されたとはいえ、貧困家庭の親の多くは子どもを就学させるよりも労働させるほうを優先した。また、保護する者のいない孤児や家を出て路上で暮らす子どもたちにとっては、通学という選択肢はなく、物乞いや盗みをも含めた広い意味での労働によって収入を得る以外に生きる術はなかった。

一方、近代国家の建設をめざす政府は、貧困家庭の子どもや保護者のいない子どもの生存の保障が公共の福祉を担う国家の義務であると認識するようになり、1917年制定の憲法において児童労働を禁止し、以前からある救貧院や矯正施設の整備、児童裁判所の設置を進めるなど子どもを保護するための制度を整えていった。こうした子どもの保護は、人道的な観点からなされるだけではなく、社会秩序の不安定化を防止するための社会統制のひとつとして考えられた。また、子どもを保護する社会福祉制度は公教育制度とともに、経済活動を担う労働者および消費者として、さらには国家に忠誠を誓う国民として子どもを規律訓練化する装置でもあった。メキシコにおける児童労働の禁止は、このような国家支配層の重層的な思惑のなか、貧困や保護者不在などによって社会的に弱い立場にある子どもを保護および統制するための政策の一環として20世紀のはじめに提起されたのである。

しかしながら、子どもを保護するための政策がとられ、児童労働を禁止する論調が世界的に高まっているにもかかわらず、子ども自身や家族の生存のために働かざるを得ない子どもたちは、今日にいたるまで消滅することはなかった。そうした現状を踏まえ、近年、南米を中心に子どもが主体となって「子どもの働く権利の保障」を訴える主張があらわれてきた¹⁾。メキシ

コを含めラテンアメリカにおいては、歴史的に、子どもが働くことに対して一定の意義を見出す主張が根強くあった（杉本・櫻井・工藤 2009: 21-22）²⁾。本稿では、こうした同地域の歴史的な文脈を念頭におきつつ、貧困のなかで働く子どもたちの労働の歴史について、とりわけ20世紀前半のメキシコ・シティの路上で新聞を売る子どもに焦点を当てて考察したい。新聞売りの子どもに着目する理由としては、本論でも述べるように、19世紀末から20世紀前半にかけての複雑な政治状況のなか、多くの子どもたちが情報の流通に関わる主要なメディアである新聞を市民に届ける重要な役割を担っていたことにある。

メキシコにおける路上での労働や新聞売りに関する研究は、米国およびメキシコにおいていくつかの蓄積がある³⁾。日本においては、近年の児童労働に関する研究はあるものの歴史研究は皆無に等しいことから、本稿においては米国とメキシコでなされた研究を参照しつつ、当時の新聞記事や新聞販売の関係者で組織された組合による出版物の記事を加えて、20世紀前半における路上での子どもの労働の意味について、とりわけ新聞や雑誌の路上販売という仕事に焦点をあてて検討する。さらに、1960年代に実施されたメキシコ・シティでの新聞販売人に対する調査報告書や、1940年初頭に発表された路上での雑誌販売体験記などの資料をもとに、20世紀前半のメキシコ・シティにおける新聞売りの子どもの労働実態の一端を明らかにしたい。

1 路上での経済活動

19世紀末のメキシコは、ポルフィリオ・ディアス（Porfirio Díaz 1830-1915）独裁政権（1876、1877-1880、1884-1911）のもと、積極的な外資の導入による自由主義的な経済政策によって、破綻していた国家財政を立て直し、首都メキシコ・シティでは、パリを模した都市整備や内外ともに豪華な装飾が施された建物の建設などが進められた。そして、1910年には独立戦争開始100周年を記念する大々的な祝賀行事が開催され、世界各国から使節団が招待された。ディアス大統領は、メキシコがヨーロッパ諸国に肩を並べる近代国家の仲間入りをしたことを世界に訴えようとしたのである。その一方で、人口の多くを占める農民や労働者の生活は厳しくなり、先住民反乱や労働争議が多発するなど、急速な近代化にともなう経済成長の負の側面も顕在化する。メキシコ・シティでは、疲弊した農村部から流入する貧しい農民層による人口増加が進み、それにとまって低所得者居住地域の拡大、アルコール依存者や犯罪や売買春の増加など、都市化による社会問題が深刻となっていた。

祝祭気分の醒めやらぬ1910年末、ディアスの長期独裁政権を批判し民主化を求めるフランシスコ・マデーロ（Francisco I. Madero 1873-1913）⁴⁾の呼びかけに応じて、地方で散発的な武装蜂起が起こり革命へと発展する。そして、ディアス体制に不満をもつ地方の富裕層から、土地をもたない貧しい農民層や過酷な状況で働く労働者層にいたる多くの人びとが参加する武装闘

争がメキシコ各地で勃発すると、1911年にはディアス大統領がバリーに亡命して長期の独裁政権が終わり告げた。その後、メキシコはさまざまな党派による権力闘争が繰り返され内戦状態に陥るが、1917年になると世界的にも先進的といわれた憲法が制定され⁵⁾、1920年代になって内戦状態が収まるにつれて国家の再建がはじまる。しかし、植民地時代から続く社会的・経済的格差は、ディアス大統領の自由主義政権下において一層拡大し、さらに革命による内戦、1929年の世界恐慌などによる国内の混乱が続き、メキシコの社会経済は非常に難しい状況におかれた。

このような状況のなか、メキシコ・シティに暮らす多くの労働者層は厳しい生活を強いられるが、工場や商店などに雇用されたり、職人として専門的な仕事に従事したりすることのない貧しい人びとが多数存在していた。この時代、公教育が拡大しはじめたとはいえ、低所得者層のあいだでは就学率や識字率が低く、知識や技術をもたない者たちは安定した職に就くことは困難であった。また、地方から職を求めて都市部に出てくる農民も多く、こうした人たちもまた仕事を見つけることは容易ではなかった。それゆえに、職を得ることのできない貧困層の人びとにとって路上での仕事は、家族を養い、またみずから生存するために不可欠な経済活動となった。ここでいう路上での仕事とは、飲食物・衣服・日用品・中古品・出版物などの販売、ゴミの収集と再利用、荷物運びや靴磨きなどのサービスの提供、商業広告、大道芸の披露、売春などである (Barbosa Cruz 2008: 78)。注目すべきことは、路上でおこなわれるさまざまな活動には、多くの子どもたちも大人とともに従事していたことである。

こうした路上での活動は、働く者からすれば生きるための不可欠な労働であるが、支配層からすると正規の経済活動とはみなされず、町の衛生環境を悪化させ、社会の統制や秩序を乱し、ときに犯罪と結びつく危険な行為ととらえられることが多かった。とりわけ働くために路上に出ている子どもたちは、学校に行くこともなく、街中で遊びまわっていたり、物乞いやときには窃盗をしたりする非行年少者としてみなされることがあった。1930年代に少年犯罪に関する研究を発表したセニセーロスとガリードは、路上で働く子どもたちについて次のように述べている。

われわれが、自由あるいは自営の労働 (trabajo libre o a domicilio) と名づけたグループに関しては、もしこのグループが従事している活動に労働という名前を与えるのであれば、それはもっぱら、これらの活動を何らかのかたちで評価することを可能にするという目的をもっているにすぎないということを指摘しておかなければならない。なぜならば、のちにみるようにこのグループは、怠惰のままであるため、あるいは物乞いをするための単なる口実としてこれらの活動をとらえているからである (Ceniceros y Carrido 1936: 112-113)。

荷物運びや靴磨き、飲食物・たばこ・富くじ・出版物の販売などの路上で収入を得る活動は労働としてはみなされず、怠けるための方便として、あるいは物乞いや犯罪の萌芽としてみな

されてきた。とりわけ、国の将来を担うべき子どもたちの多くがこうした路上での活動に従事していることは、国家指導層や専門家などのエリート層のあいだに国家の衰退に対する強い危機感を呼び起こした（青木 2015: 122-123）。そのため、路上で働く子どもたちは、警察による取り締まりの対象となる場合が少なくなかったのである。

しかしながら、飲食物や新聞、富くじを売るにしても靴磨きをするにしても、販売するための商品や靴を磨くための道具を提供する大人がいなければこれらの仕事をおこなうことは不可能であった。すなわち、生活の糧を求める貧しい子どもたちの労働を積極的に利用する、いわゆる「元締め」とでもいえる大人たちが存在していたこともまた事実であり、子どもたちを利用する側は、安価な労働力として働く子どもたちを求めていたのである。とりわけ子どもたちが多く従事していた新聞販売については、新聞社が、利益を確保するために末端の販売人⁶⁾である新聞売りの子どもたちを守ろうとした。たとえば、19世紀末の新聞販売人に関する研究をするグティエレスとガントゥスは、1890年5月25日付けの新聞記事に言及して次のように指摘する。

新聞販売人の擁護は、新聞社の販売と存続の必要性と切り離すことはできない。1890年、エル・ディアリオ・デル・オガール（El Diario del Hogar）紙はそれを指摘して、新聞販売人の集団が拘束されたことに対して、「首都で一時的に販売していた新聞の出版は、新聞販売人の不足でいつもの販売ができなかった期間に非常に落ち込んだ」と明らかにした（Gutiérrez y Gantús 2013: 89）

また、この時代の子どものイメージや表象に関して新聞記事の写真などをもとに論じるカスティージョ・トロンコソは、「新聞販売人のいない新聞は、兵士のいない政府のようなもの（La Prensa sin Papeleros es Como un Ejectivo sin Soldados）」との見出しを掲げた新聞記事を紹介し、新聞社と新聞販売人との密接な関係を指摘する（Castillo Troncoso 2006: 223-225）。

さまざまな新聞が刊行されるようになった19世紀後半以降、新聞社のなかには政府と良好な関係を築き、政府に好意的な記事を掲載する新聞もあったため、新聞の流通は政府にとっても利益があった。そのため、路上での新聞販売を容認することは、政府にとってかならずしも都合の悪いことではなかったはずである。一方、独裁政権に反対する勢力もまた、新聞を利用してみずからの主張を社会に訴えた。すなわち、独裁政権期から革命期にかけてさまざまな政治勢力が権力争いを繰り返すなか、政府にとっても反政府勢力にとっても、出版物の流通を介した言論の支配や統制は重要な戦略となっていたのである。

また、都市の治安や秩序の維持という観点からすると、路上での商売を統制あるいは規制することも政府にとっては重要な課題となっていた。そのためディアス独裁政権下の1897年には、富くじと新聞の販売が許可制となり、革命勃発後の1916年にも出版物の販売に関する規則が改

めて制定された（Gutiérrez y Gantús 2013: 97-99）。新聞売りだけではなく靴磨きもまた許可制となり⁷⁾、こうした商売を路上でおこなう場合、つねに許可証を携帯することが義務づけられ、それに違反した場合は警察に拘束されることもあった。こうして路上での「商売」が社会問題とされる一方で、その必要性も認識されることとなり、その矛盾を解消するために許可制という統制が課されることになったのである。

次章では、許可証といういわば政府のお墨付きをもらうこととなった新聞販売人に焦点を絞る、路上で働く子どもたちに対する社会の対応をみてみよう。

2 新聞を売る子どもたちへの配慮

路上での仕事は多種多様であるが、とりわけ新聞販売は、個人的な商品やサービスの提供ということにとどまることのない政治的・社会的意味をもっていた。上述のとおり、19世紀末から20世紀前半にかけて、国内の政治的な緊張が高まりメキシコ各地で動乱が続くなか、情報の統制や操作が重要な政治的戦略となっていたからである。もちろん新聞売りの子どもたちが、そのような役割を担っていることに自覚的であったわけではないだろうが、政治的あるいは商業的な目的をもって新聞の流通に関与しようとする者たちにとって、それを末端で支える新聞販売人は不可欠な存在であり、それゆえにその仕事に従事する子どもたちが賞賛されることも多かったのである（Gutiérrez y Gantús 2013: 111-112）⁸⁾。メキシコ新聞販売人組合の編集による2010年の出版物には、当時の子どもの新聞売りについて以下のように述べられている。

小さな売り子への配慮は新聞編集者の懸念であった。彼らがいなければ通りで声を欠くことになる。売り子は新聞に魂を刷り込む（imprimir）のである（Camacho López 2010: 34）⁹⁾。

路上において新聞を売る子どもたちは、近代化をめざす社会にとって危険をもたらす「犯罪予備軍」としてみなされる反面、言論の自由や統制に関わる、あるいは企業に利益をもたらす重要な役割を担う「労働者」としてみなされた（Gutiérrez y Gantús 2013: 82）¹⁰⁾。新聞売りにたいしてはこうした矛盾するとらえ方がされていたが、貧しい子どもにとって新聞売りは、非常に人気のある仕事だったのである。20世紀前半のメキシコにおける子どもの労働を研究するソセンスキは、子どもの新聞売りについて次のように述べる。

確かに都市は、子どもたちがわずかな金を得ることができるようにさまざまな道を提供していた。しかしながら、新聞売りは、圧倒的にもっとも人気のある活動のひとつであり、都市の貧しい子どもの日常の仕事であった（Sosenski 2010: 182）。

新聞売りが人気の職業となっていたのは、路上でおこなわれるほかの仕事と比べ、貧しい子どもたちにとってさまざまな利点があったからであろう。19世紀後半から20世紀にかけて新聞や雑誌などの出版物の発刊が相次ぎ、それにとまって多くの新聞販売人が必要となると、新聞社や出版社は、貧しい子どもたちにも広く新聞販売の仕事を与えた¹¹⁾。そして、販売人のための福利厚生ともいえるサービスが、子どもたちに対して複数の新聞社によって提供されたのである。たとえば、1894年には、新聞販売人のための宿泊所が用意されているが (Camacho López 2010: 34)、新聞販売人のなかには、家がない、あるいは家にはほとんど帰らないため路上で寝泊まりする子どもも多く、宿泊場所や食事を提供することは多くの販売人を確保するための方策でもあった。革命の動乱が落ち着きはじめて1924年には、エル・デモクラタ (El Demócrata) 紙を主宰するラファエル・マルティネス (Rafael Martínez 1881-1944) を中心に「新聞販売人の家 (la Casa de Voceador)」と名づけられた寄宿所が、複数の新聞社によって開設されることになった¹²⁾。

新聞社だけではなく、貧しい人びとへ支援をしている慈善団体もまた、新聞売りをする子どもたちに贈り物をするなどの援助を繰り返しておこなっていた。たとえば、1920年に大統領となったアルバロ・オブregon (Álvaro Obregón 1880-1928) の妻であるマリア・タピア (María Tapia) が率いる女性団体が、貧しい子どもたちの支援の一環として1922年のクリスマスには新聞売りの子どもたちに贈り物をしている¹³⁾。また、新聞社や慈善団体のほかにも、新聞の販売に関わる人たちで組織された組合も同様に、貧しい子どもたちに対する援助をおこなっていた。

この組合は、新聞の販売店のオーナーや新聞の販売人によって1923年に結成された「連邦区出版物販売人組合 (Unión de Expendedores, Voceadores y Repartidores de Prensa del Distrito Federal)」である。新聞販売人は、新聞社から新聞を直接仕入れるのではなく、新聞販売店 (expendio) を介してその日に売る新聞を手に入れていた。新聞販売店は、新聞社にとってはまとめて新聞を購入してもらうことができ、一方、新聞販売人にとっては掛売りで新聞を仕入れることができる両者にとって都合のいい仲介役となっていた (Salgado Bravo 1966: 104)。1931年には、約2,000人が組合員として参加し、そのうち女性と子どもがそれぞれ500人であったと当時の組合の報告書に記録されていたという (Camacho López 2010: 37)¹⁴⁾。新聞販売人のすべてが組合に入ったわけではないが、新聞や雑誌などの定期出版物の多くがこの組合に加入する販売店や販売人を通して流通するようになり、組合は新聞社や出版社さらには政府に対しても大きな影響力をもつようになった¹⁵⁾。

新聞売りの子どもたちは、組合員数を増やして影響力を強化しようとする組合にとって欠かすことのできない重要な存在であった。それゆえに組合は、衣服や下着の配付、宿泊所の開設や食事の配給、イベントの開催など子どもたちに対する援助を積極的におこなっており、こう

した慈善事業ともいえる活動には賛辞が寄せられている¹⁶⁾。また、ストライキのため新聞が発行されなかった日には、その日の売り上げ分の損害を新聞販売人に補償するため、新聞社から提供された現金が組合を通じて支給されることもあった¹⁷⁾。さらに、寄宿施設¹⁸⁾においては、宿泊だけではなく公教育省との連携による授業も提供されるようになったのである (Camacho López 2010: 34, Salgado Bravo 1966: 105)¹⁹⁾。

子どもたちへの教育については、寄宿所における授業にとどまらず、1946年にはマヌエル・コルチャード (Manuel Corchado) と名付けられた新聞販売人学校 (Escuela de Voceadores) が設置され、読み書き算やメキシコの歴史のほか、タイプ技術、速記術、簿記などの職業訓練的な教育がおこなわれるようになる。さらに、1949年には公教育省に対し、この学校の認可とともに教師の派遣や黒板などの物資の支援の要求がなされた (Salgado Bravo 1966: 119-120)。学校の名前ともなっているコルチャードとは組合発足当時の中心人物の名前であり、彼は、組合による子どもへの支援の成果について以下のように述べたという。

600人の新聞売りが昼の部の学校に通い、そのほかの多くは夜の部に通っている。非識字は、著しく減少した。・・・一方、子どもたち自身の外見も3倍は改善した。混紡の服と下着を配った (Aurrecoechea y Bartra 1993: 82-83からの引用)。

新聞社や組合による子どもたちへのさまざまな支援については、その評価がわかれるところであろう。貧しい子どもたちに仕事を与えるとともに、福利厚生から教育にいたるまで提供することで子どもたちの生活を守り、将来への道を開く機会を提供したという評価もできるかもしれない。その一方で、新聞社は安い労働力を使って収益を上げるため、組合は組合員の数を増やしてみずからの勢力を拡大するため、それぞれが子どもたちを必要としてきた。それゆえに新聞社も組合も、結局のところ貧しい子どもたちを利用し、そして搾取しているだけではないかという批判がある。ソセンスキは、組合の中心人物であるコルチャードが、貧しい新聞売りの子どもたちを搾取する人物であると非難されているとして以下のように指摘する。

コルチャードは、良心の呵責をほとんどもたない、「感情の薄い」「教養のない」暴君、つまり、「家族も家庭もない」新聞売りを搾取してきた「都会の底辺にいる輩」と非難される男であったとすることができる (Sosenski 2010: 196)。

新聞社や組合による新聞売りの子どもたちへの支援は、「慈善」とも「偽善」とも解釈はできるであろうが、新聞社や組合の大人たちの思惑がどうであれ、それは貧しい子どもたちやその家族にとって重要なことではない。注目すべきは、貧困のなかに生きる子どもや家族が、こうした支援を利用しつつ生き延びてきたという現実ではないだろうか (青木 2020: 85)。

3 新聞売りの労働実態

新聞売りの子どもたちはどのように働いていたのだろうか。新聞売りの子どもたちの声を聞く直接的な資料は多くはないが、1960年代に実施されたと推測される新聞販売人に対する調査においておこなわれたインタビューがある。また、1941年に出版された雑誌のなかに、雑誌販売人と48時間にわたって行動をともにして書かれた体験記事が掲載されている。後者は、子どもというよりも青年の雑誌販売人を対象とした密着取材にもとづくものであるが、路上で新聞や雑誌を販売する青少年の労働や生活の様子をうかがい知ることのできる資料である。本章では、これらの資料²⁰⁾をもとに、路上で新聞や雑誌を売る青少年たちの労働実態の一端を探ってみたい。

新聞売りをはじめするためには、当然のことながら、まず新聞を販売店から仕入れる必要がある。つねに決まった特定の販売店から新聞を仕入れるのであれば掛売りも可能であったようだが、仕事をはじめたばかりの子どもがすぐに信頼を得られるとは考えにくい。また、子どもたちはさまざまな仕事を転々としたり、複数の仕事をかけもちしたりすることもあるため、かならずしも新聞販売だけに長くかかわっていたわけではなく、特定の販売店をもたない売り子も多かったであろう。したがって新聞を仕入れるためには、まずは元手が必要であった。家族がいる子どもであれば、親や兄弟から資金を調達することもあるだろうし、荷物運びや使い走りなど元手の不要な仕事をして資金を稼ぐということもあるだろう。元手の入手についてはさまざまな方法が考えられる。

新聞配達の仕事は朝が早い。夜が明ける前に販売店に出向き朝刊を仕入れることになるが、そこでまずやらなければならないことは、新聞をどのくらい仕入れるかを試算することであった。新聞がどの程度売れるかは、ニュースの内容やその日の天候などに左右されるため、毎日同じ数だけ売れるわけではなかった。新聞が売れ残ってしまった場合は売れるまで路上で客を探るか、残った新聞をほかの売り子に安く譲ることもあった。売れ残ったりほかの売り子に安く譲ったりすれば損失となるが、それは自分が負わなければならない。それゆえに、新聞販売人たちは、新聞が売れ残らないようにしっかりと試算して新聞を仕入れ、その後、人通りや車の往来の多い通りで売り場を確保するために路上へと出て行ったのである。

路上へと出かける際に気をつけなければいけないことは事故である。メキシコ・シティでは20世紀に入ると自動車や路面電車の交通量が増え、路上へ働きに出る新聞売りの子どもたちが交通事故にあうことも少なくはなかったようだ。とくに、赤信号で止まった自動車のあいだを縫うように新聞を売る場合には注意が必要であった。こうして仕事場の確保に向かうことになるが、常連の客をもつ売り子はいつも同じ場所で客を待つことになる。ただし、スタンドを構えて新聞を売っている大人や、ほかの新聞売りの子どもたちと売り場をめぐる問題が起きな

いように場所を選ばなければならない。そして売り場が決まると、通行人が新聞のニュースに興味をもつように、記事の内容を大げさに脚色しつつ新聞の名前とともに大声で叫ぶ²¹⁾。こうして新聞が売り切れるまで、あるいは時間が許す限り新聞を売り続けていたのである (Gutiérrez y Gantús 2013: 84, Sosenski 2010: 184-189)²²⁾。

新聞販売人は商売に出る前に、商品を手に入れるための資金を用意したうえで、ニュースの内容や天候などを確認して仕入れの数を計算し、客の購買意欲を高めるための口上を考え、交通量の多い場所を探していち早くそこを売り場として確保しなければならない。すなわち、事前に十分な準備をすることが重要であり、それには知識や能力、そしてなによりも経験が必要であっただろう。1930年代に新聞売りをはじめ、のちに新聞販売店を営むようになった男性の回想によると、はじめの6ヶ月間は、先にこの仕事に従事していた友人から新聞を売るための秘訣を教わっていたという。しかしその後、その友人が姿を見せなくなったためひとりで仕事の差配をするようになったが、ほかの売り子にだまされて支払いをしたにもかかわらず、商品を手に入れることができないということもあったという (Salgado Bravo 1966: 92-95)。新聞売りの子どものあいだでは、売り場の確保や金銭のやりとりなどをめぐる問題が多く、けんかも絶えなかつただろうと推測できる²³⁾。

新聞売りの子どもどうしの関係は、かならずしも上記のような軋轢ばかりではなく、同じような境遇にあり年齢も近いことから友情関係を築くことも多かった。20世紀なかばに8歳で新聞売りをはじめた少女へのインタビューによると、出かけた際にたまたま多くの新聞売りの子どもたちの姿を見て、父親と別れた母親を助けるために働くことにしたという。その少女は、同じように新聞を売って働く少女と出会い友だちとなった。ふたりで同じ場所で新聞を売り、眠くなるとどこかの家の扉のところで眠ったり、夜が遅くなるとその友だちの家に泊まったりすることもあった (Salgado Bravo 1966: 90-92)。この少女や、友人から商売のこつを教わったという上述の少年の回想からもわかるように、親しくなった友人とともに働き、一緒に食事をし、そして路上で眠るといった生活を送る新聞売りの子どもたちは多かった²⁴⁾。また、新聞を売る子どもたちにとって商売を成功させる重要な鍵は、新聞を購入する客との関係であった。先に紹介した少女は、ちょこちょこ動き回る自分の様子を見た客が配慮してくれたため、仕入れた新聞はすべて売れたと語っている (ibid.)²⁵⁾。

新聞販売人どうしの仲間意識については、1941年、雑誌に掲載された雑誌販売人に対する密着取材の記録にも示されている。取材者が路上で雑誌を売る青年とともに過ごした48時間のなかで、雑誌の販売人がともに路上で雑誌を売り歩き、食事に出かけ、ビリヤードに興じ、ビールを飲む様子が描かれている。一通り雑誌を売り歩いたあとは、仲間どうして売れ残った雑誌を集めて、再度みんなでそれを売りに出かけた。夜になると取材者は、48時間彼から離れなかつ

た販売人の自宅へと立ち寄ると、販売人は集合住宅の家に住む母親に、わずかではあるがその日の稼ぎを手渡した。母親は息子に家に戻って欲しいと何度も訴えるが、彼はそれを望まなかった。そして、市場の片隅や安いホテルで仲間とともに夜を過ごしていたのである。

こうして路上で新聞や雑誌を売る青少年たちは、同じく新聞や雑誌を売る仲間たち、新聞販売店や組合の大人たち、新聞を購入する客などさまざまな人びとと複雑な関係を取り結びながら毎日のように通りに出かけて仕事をし生活費を稼いでいたのである。その働く姿勢からは、社会に情報を届けるという社会的な役割を果たすことや、家族の生活を支えることへの誇りが感じられる。さらに、路上で新聞を売って働くことで、仕事に関する技術や人間関係の結び方を覚えるなど、路上での労働を通じて成長していく子どもの姿を見ることができるのではないだろうか。

おわりに

筆者が新聞売りの子どもの関心をもったきっかけは、本稿でも参照したソセンスキの研究書の表紙に掲載された写真をみたことである（下図）。新聞を抱えた3人の子どもたちが、にこやかな表情で歩道を歩いている。厳しい環境のなかで働いているはずの子どもたちの表情をみて、子どもたちは、日々苦しい思いをしているだけではなく、そこには喜怒哀楽さまざまな思いがあるということに気づかされた。



（図 路上で新聞を売る子どもたち、1920年ごろ）

Niños vendiendo periódicos en la calle, retrato. 77_2014827_134500: 197862, Archivo Casasola, ca. 1920, Mediateca, Instituto Nacional de Antropología e Historia de México.

新聞売りの子どもたちは保護者のいない孤児ばかりではなく、貧しいながらも家族がいて家もある子どもも多く、親や兄弟とともに働くこともある。そうした子どもたちは、家に帰る日もあれば路上で寝泊まりすることもあるが、多くの子どもたちが仕事で得た収入をすべてではないかもしれないが親のもとに届けている。子どもたちが得る収入はたとえわずかであっても、苦しい家計にとっては貴重な現金収入であり、子どもたちもまた家計を支える重要な家族の一員なのである。貧困家庭においては、こうした家族どうしの相互扶助が当然のこととなっている (Blum 2011)。また、家族のいない子どもは、みずからの力で自立して生活の糧を得ている。路上での労働は、そうした貧しい家庭に生まれた子どもや保護者のいない子どもが生きていくための不可欠な活動であり、それを通じて家族の生活向上に貢献するという矜持を抱いたり、社会のなかでひとりだちをしていくために必要な能力と経験を積んだりすることに繋がっているのである。

最後に、本稿は児童労働を賞賛するものでも、また「けなげに働く貧しい子どもたち」という感傷的なイメージをつくることを目的としているものではないことを強調しておきたい。そもそも児童労働を生むような状況をつくりだした政治的、経済的、歴史的背景を検討し、劣悪な労働環境で働かざるを得ない子どもたちの問題の解決策を探るべきであるということはいうまでもない。それを前提に、こうした環境に生きてきた子どもたちが存在してきたという現実を明らかにし、それを踏まえたとえ子どもたちが働くことの意義を問い直すこともまた重要な課題となるのではないだろうか。

注

- 1) たとえば、クシアノビッチ、アレハンドロ (五十川大輔編訳) 『子どもと共に生きる—ペルーの「解放の神学」者が歩んだ道』現代企画室、2016年参照。
- 2) 1980年代にメキシコ首都圏の民衆居住地区で児童労働と教育の関連について調査した米村は、同地域において「彼らの価値観は概して児童労働に否定的なものではなく、そうした傾向の広がり、児童労働を許容する文化とでも呼ぶべきものの存在を想定させる」と述べる (米村 1992b: 302)。
- 3) メキシコ・シティにおける路上での労働に関しては、バルボサ・クルス (Barbosa Cruz 2008, 2010)、児童労働に関してはブルム (Blum 2009, 2011)、ソセンスキ (Sosenski 2010)、新聞販売人に関してはグティエレスとガントゥス (Gutiérrez y Gantús 2013) などがある。
- 4) 革命の中心人物であったマデーロは、1911年のディアス亡命後、選挙を通じて大統領に就任するものの、1913年にメキシコ・シティで暗殺されメキシコは内戦状態へと入っていく。内戦には、多くの女性たちが夫や恋人や息子などとともに従軍し、食事や看護、宿泊地の確保など後方の役割を担ったり、兵士 (soldadera) として銃をとって戦ったりした。子どものいる女性は子どもを連れていくことが多く、子どもたちも伝令役やときには兵士として内戦に参加した。革命は、年齢や性別を問わず多くのメキシコ人の生活に多大な影響を与えたのである。また、革命の闘争の

なかで父親が亡くなった家庭の生活は非常に厳しく、それが子どもたちを労働へと向かわせる理由のひとつもなった。

- 5) 1917年憲法では、8時間労働やストライキ権などの労働者の権利を保障する条項が盛り込まれ、14歳以下の児童労働も禁止された。
- 6) メキシコでは、路上で新聞を売る者をパペレーロ (papelero) またはボセアドール (voceador) と呼ぶ。前者は新聞を意味するパペル (papel = 紙) から来た呼び名であり、後者は路上で新聞を売る際に販売人が新聞名やニュースの内容などを大きな声で叫ぶ (vocear) ことに由来する。
- 7) メキシコ市歴史文書館には、新聞販売や靴磨きの許可を求める申請書や、路上販売をめぐるさまざまなクレームに関する文書など、路上での活動に関わる史料が大量に保管されている。
- 8) こうしたことから、路上での労働のなかでも新聞売りに関する史料が比較的多く残されている。たとえば、新聞販売の許可を取るため連邦区 (メキシコ・シティ) に提出された申請書、新聞記事、写真などがある。なお、当時の写真や新聞記事のなかには、本論でも触れるように、新聞売り子どもたちに贈り物をする場面を紹介するものが数多くある。
- 9) 「声を欠く」というのは、注6) で述べたように、新聞を売りに通りに出た販売人たちが大きな声で新聞の名前を叫ぶという売り方にかかわる表現であり、「魂を刷り込む」というのは、販売人たちが通行人の気をひくように新聞の内容をときに脚色をして大げさに叫ぶことにかけているのであろう。日本の瓦版と同じような販売方法だったと言えるのかもしれない。
- 10) 組合の創設の中心人物であったマヌエル・コルチャードは、1927年2月10日、かつて新聞売りはいたずら小僧 (pilluelo) と考えられていたが、今では組織化された労働者のなかに位置づけられると述べている (Corchado 1927/Unión 2010: 75)。なお、この指摘は上記日付の新聞または雑誌の記事ではないかと推測されるが、これが転載されている組合編集に出版物には日付のみで新聞または雑誌名の記載はない。
- 11) 1930年代におこなわれた研究によると、新聞販売人の90%が18歳未満であり、7歳くらいの子どものも働いていたという (Ceniceros y Garrido 1936: 114-115)。
- 12) 組合が編集した出版物によると、この施設の設置は1924年11月に決定されたとあるが (Camacho López 2010: 34)、1925年7月11日付け新聞 (El Universal Gráfico) に、組合が合意した「新聞販売人の家」が近日開所となる旨の記事があることから、開所は1925年ではないかと推測される。
- 13) El Universal Gráfico 1922年12月21日。
- 14) 組合設立当初は、組合員は1,500人、うち200人が女性で子どもは800人とされている (Salgado Bravo 1966: 111)。
- 15) この組合に対しては、一見するとボス支配によるマフィアに操られているようだが、影響力が増大し、数年後には出版社に条件を押しつけることができるほどになったという指摘がある (Aurrecoechea y Bartra 1988: 204)。また、組合結成4年後には、出版物の流通に強い影響力をもつ組合の役割に政府が目注するようになったといわれる (Aguilar y Terrazas 1996: 42)。
- 16) たとえば、El Universal Gráfico 1925年7月28日。
- 17) El Universal Gráfico 1923年4月30日。
- 18) 1941年3月に発売された雑誌に掲載された記事には、「新聞販売人の家 (la Casa de Papelero)」

が、出版社と組合、新聞販売人の協力で建設中であると述べられているが、1920年代に設置された施設との関連は不明である。1940年代の施設の建設は、組合幹部であったコルチャードによって発案されたものであり、彼自身が多額の寄付をしている (Davó Lozano 1941/Unión 2010: 80)。

- 19) そこには新聞売りの子どもだけではなく、新聞売りと同じく子どもが従事することの多かった靴磨きの子どもも授業を受けていたという (Camacho López 2010: 34)。
- 20) 本研究において参照した新聞販売人に対する調査報告書は、メキシコ国立自治大学社会学研究所から出版されたもので、そこには出版年が書かれていないが、国立図書館のデータベースには1966年と記載されている。そこからこの調査は1960年代に実施されたと推測した。この調査では、複数の新聞販売人の経験について聞き取りがおこなわれ、子どものころの新聞売りの体験について4名の回想がこの調査記録に収録されている。一方、1941年の体験記事は、雑誌 Hoy から依頼を受けた執筆者が、路上で Hoy を販売する若者たちと48時間行動をともにして書いたものである。この記事は同誌に掲載されているが、本稿では、2010年に新聞販売人組合によって編集された出版物に再録されたものを参照した (Davó Lozano 1941/Unión 2010: 80-83)。
- 21) 新聞販売人たちは、客の関心を惹くために、とくにスキャンダラスなニュースを誇張して叫んでいたため、路上での販売の際には新聞の名前以外のことを叫ぶことが禁止された。ただし、それがどこまで守られていたかは不明である。
- 22) 小学校は午前と午後の2部制となっており、新聞売りの子どもたちのなかには、朝刊を売ったあとに学校に通う者もいた。
- 23) 本稿が参照する1960年代の調査によると、新聞販売店と販売人との関係については概ね良好であったというが (Salgado Bravo 1966: 37)、この点についてはさらに検討する必要がある。
- 24) メキシコ国立人類学歴史学研究所メディアライブラリー (Instituto Nacional de Antropología e Historia de México, Mediateca) には、新聞売りの子どもたちを写した20世紀前半の写真が数多く保管されているが、そこには複数の子どもたちが路上で並んで新聞を売ったり、一緒に食事をとったり、寄り添って眠っていたりする姿が写されている (青木 2020: 80-82)。
- 25) インタビューを受けた別の女性は子どもではなかったが、スタンドを構えて新聞を売っていたこともあり常連客もいたようで、客から飲み物を差し入れてもらうなど支援をしてもらうことがあったと述べている (Salgado Bravo 1966: 97-99)。

新聞

El Universal Gráfico

引用・参考文献

- Aguilar, Gabriela y Terrazas, Ana Cecilia (1996), *La prensa, en la calle: los voceadores y la distribución de periódicos y revistas en México*, México: Editorial Grijalbo/Universidad Iberoamericana.
- Aurrecochea, Juan Manuel y Bartra, Armando (1988), *Puros cuentos I: historia de la historieta en México, 1874-1934*, México: Editorial Grijalbo/Consejo Nacional para la Cultura y las Artes.
- Aurrecochea, Juan Manuel y Bartra, Armando (1993), *Puros cuentos II: historia de la historieta en México, 1934-1950*, México: Editorial Grijalbo/Consejo Nacional para la Cultura y las Artes.
- Barbosa Cruz, Mario (2008), *El trabajo en las calles: subsistencia y negociación política en la ciudad de México a comienzos del siglo XX*, México: El Colegio de México/Universidad Autónoma Metropolitana.
- Barbosa Cruz, Mario (2010), “Trabajadores en las calles de la Ciudad de México: subsistencia y negociación y pobreza urbana en tiempos de la Revolución”, *Historia Mexicana*, Vol. LX, Núm. 2, México: El Colegio de México.
- Blum, Ann Shelby (2009), *Domestic Economies: Family, Work, and Welfare in Mexico City, 1884-1943*, Lincoln: University of Nebraska Press.
- Blum, Ann Shelby (2011), “Speaking of Work and Family: Reciprocity, Child Labor, and Social Reproduction, Mexico City, 1920-1940”, *Hispanic American Historical Review*, 91: 1.
- Camacho López, José Luis (2010), “Apuntes para una epopeya libertaria”, en *Unión* 2010, pp.21-39.
- Castillo Troncoso, Alberto del (2006), *Conceptos, imágenes y representaciones de la niñez en la ciudad de México, 1880-1920*, México: El Colegio de México/Instituto de Investigaciones Dr. José María Luis Mora.
- Ceniceros, José Ángel y Garrido, Luis (1936), *La delincuencia infantil en México*, México: Ediciones Botas.
- Corchado, Manuel (1927), “Gremio de unidad”, en *Unión* 2010, p.75.
- Davó Lozano, Jorge (1941), “La vida de un papelerero”, *Revista de Hoy*, 1 de marzo, 1941; núm. 210, en *Unión* 2010, pp.80-83.
- Gutiérrez, Florencia y Gantús, Fausta (2013), “Los pequeños voceadores: prácticas laborales, censura y representaciones a finales del siglo XIX”, Illades, Carlos y Barbosa, Mario (coords.), *Los trabajadores de la Ciudad de México, 1860-1950: textos en homenaje a Clara E. Lida*, México: El Colegio de México/Universidad Autónoma Metropolitana.
- Lombardo, Irma (1992), *De la opinión a la noticia: el surgimiento de los géneros informativos en México*, México: Ediciones Kiosco.

- Rodríguez Herández, Gina (1996), *Niños trabajadores mexicanos 1865-1925*, México: UNICEF/ Instituto Nacional de Antropología e Historia.
- Salgado Bravo, Emma (1966), *Estudio de la situación socio-económica del voceador de prensa*, México: UNAM.
- Sosenski, Susana (2010), *Niños en acción: el trabajo infantil en la ciudad de México (1920-1934)*, México: El Colegio de México.
- Unión de Expendedores y Voceadores de los Periódicos de México (2010), *Voces de la Libertad*, México: Unión de Expendedores y Voceadores de los Periódicos de México.
- 青木利夫 (2015) 「メキシコにおける子どもの保護にかんする歴史研究序説—19世紀後半のメキシコ・シティを中心に」『欧米文化研究』(広島大学大学院総合科学研究科欧米文化研究会) 第22号。
- 青木利夫 (2017) 「19世紀後半のメキシコ・シティにおける子どもの矯正施設」『欧米文化研究』(広島大学大学院総合科学研究科欧米文化研究会) 第24号。
- 青木利夫 (2019) 「メキシコ・シティにおける『恵まれない』子どもにたいする福祉政策と職業訓練」『欧米文化研究』(広島大学大学院総合科学研究科欧米文化研究会) 第26号。
- 青木利夫 (2020) 「ストリートで働く新聞売りの子どもたち—20世紀前半メキシコ・シティの貧困のなかを生きる」樋口映美編『歴史のなかのめぐりと—出会い・喚起・共感』彩流社。
- 杉本均・櫻井里穂・工藤瞳 (2009) 「児童労働と義務教育—メキシコおよびペルーの事例より」『京都大学大学院教育学研究科紀要』 第55号。
- 米村明夫 (1992a) 「児童労働と教育—メキシコ首都圏民衆居住区小・中学生の統計的分析」『アジア経済』(アジア経済研究所) 第33巻第5号。
- 米村明夫 (1992b) 「メキシコ民衆居住区の児童労働—その家族的背景および学業成績との関係」『教育社会学研究』 第50集。
- 米村明夫 (1995) 「経済危機下の教育・児童労働—メキシコ都市民衆の選択」『アジア経済』(アジア経済研究所) 第36巻第9号。

追記

本稿は、日本学術振興会科学研究費学術研究助成基金助成金(基盤研究(C)、研究代表・青木利夫、研究課題「貧困に生きるメキシコの子どもの生活に関する歴史研究」、課題番号19K02562)の助成による研究成果の一部である。

El trabajo infantil en la Ciudad de México de la primera mitad del siglo XX: los niños que vendían periódicos en la calle

AOKI Toshio

A pesar de los avances globales contra la explotación laboral de la infancia, todavía existen numerosas regiones donde los niños deben trabajar para ayudar a la economía familiar o para su propia subsistencia. México es uno de los países en los que aún no se ha eliminado el trabajo infantil. El presente estudio tiene por objeto aclarar la historia de los niños trabajadores en la Ciudad de México de la primera mitad del siglo XX. Nos centraremos especialmente en los llamados niños “voceadores” o vendedores de periódicos en la calle.

Aun entrado el siglo XX en México, y a pesar de la gradual extensión del sistema educativo durante la segunda mitad del siglo XIX en el país, los progenitores de familias con escasos recursos priorizaban poner a sus hijos a trabajar en lugar de escolarizarlos y los niños desamparados, tales como los huérfanos, para subsistir no tenían más opción que trabajar. Por otro lado, entre finales del siglo XIX y principios del siglo XX, México logró cierto grado de estabilidad política y desarrollo económico debido a la modernización que se llevó a cabo bajo la dictadura de Porfirio Díaz. La Ciudad de México creció por la industrialización y el aumento de la población. La rápida urbanización provocó un incremento de desocupados e indigentes, incluidos los niños, que tuvieron que dedicarse a diversos oficios callejeros: vendedores de diversos productos, cargadores, limpiabotas, etc. Aunque estas ocupaciones eran indispensables para los necesitados, la clase dominante no las consideraba como trabajo formal. Particularmente las actividades realizadas por los niños en la calle eran percibidas como una forma de holgazanear o el germen de la mendicidad o el crimen, a pesar de que los niños no habrían podido realizarlas a menos que ciertos adultos se las facilitaran.

El voceador, que jugaba un papel muy importante en la circulación de la información en esta época, era la ocupación más recurrente entre los niños y, de hecho, a mayoría de los voceadores que trabajaban en la calle eran niños y adolescentes. Tanto las editoriales de periódicos como el sindicato de vendedores de periódicos, organizado en la Ciudad de México en los años 20, ayudaban a los niños voceadores con alojamiento, ropa, comida e incluso educación. Las editoriales los utilizaban como mano de obra barata para obtener más ganancias y el sindicato se servía de ellos para expandir su influencia. En este sentido se podría decir que ambos exploraban a los niños indigentes en beneficio propio. Estos, por su parte, aprovechaban el apoyo de las editoriales y el sindicato para aportar recursos a su familia o subsistir por sí mismos.